

東一坊大路の調査

—第396次

はじめに

介護福祉施設建設にともなう事前調査である。調査地は平城京左京七条一坊十六坪東方の東一坊大路にあたる。調査地の一部および西側は第251～255次調査（『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』奈文研学報第56冊、1997年）、第372次調査（『紀要2005』）がおこなわれている。

調査区は南北43m、東西14m（602㎡）を設定したが、現地表面から旧表土までの客土が厚く、安全のための法面部分を広く取ったため、実質的な調査面積は約288㎡となった。調査期間は2005年11月14日から12月14日までである。

基本層序は客土（厚さ約2m）の下、耕作土である橙褐色粘質土層（厚さ約1m）が堆積する。さらに下位は調査区の南北で異なり、北半は暗灰色粘土層（厚さ約15cm）の下に地山である緑青色シルト層、南半は黄灰色粘質土層（厚さ約15cm）の下に地山である暗褐色粘質土層が堆積する。緑青色シルト層および暗褐色粘質土層上面において、遺構検出をおこなった。

検出遺構

SF6410 東一坊大路。第252次調査で一部検出しているが、さらに南北約35mについて検出した。両側溝とも調査区外にあり、検出したのは大路中央付近にあたる。遺構検出面は地山であり、路面の舗装に関わるものではない。大路上面は削平を受けていると考えられる。検出した路面の標高は54.0m前後で、ほぼ平坦である。

その他に時期・性格不明の小土坑を数基検出した。

出土遺物

出土遺物は、整理用コンテナ1箱分である。大半は橙褐色粘質土層からの出土であり、遺構にともなうものはない。主に奈良時代の須恵器・土師器、瓦があり、ほかに室町時代の土師器羽釜片などが出土している。

まとめ

今回の調査では、平城京東一坊大路の路面上には奈良時代の顕著な遺構は認められなかった。東一坊大路が、奈良時代を通じて通路として維持され、その機能を果たしていたことを示すと評価できよう。（小田裕樹）

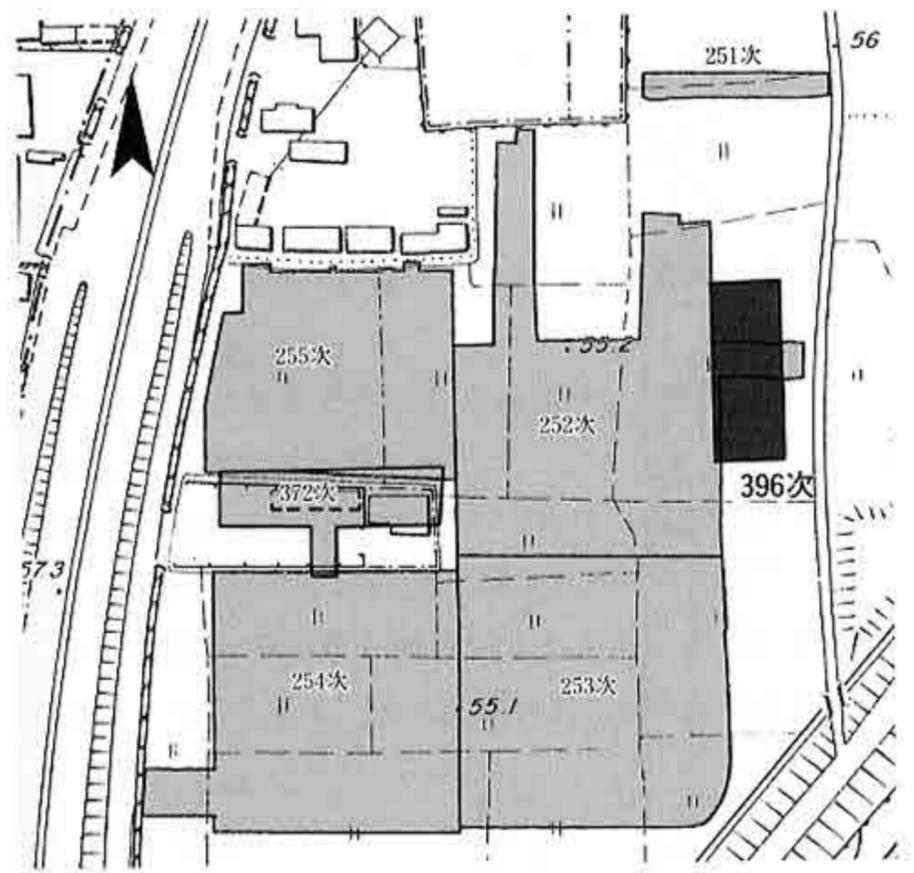
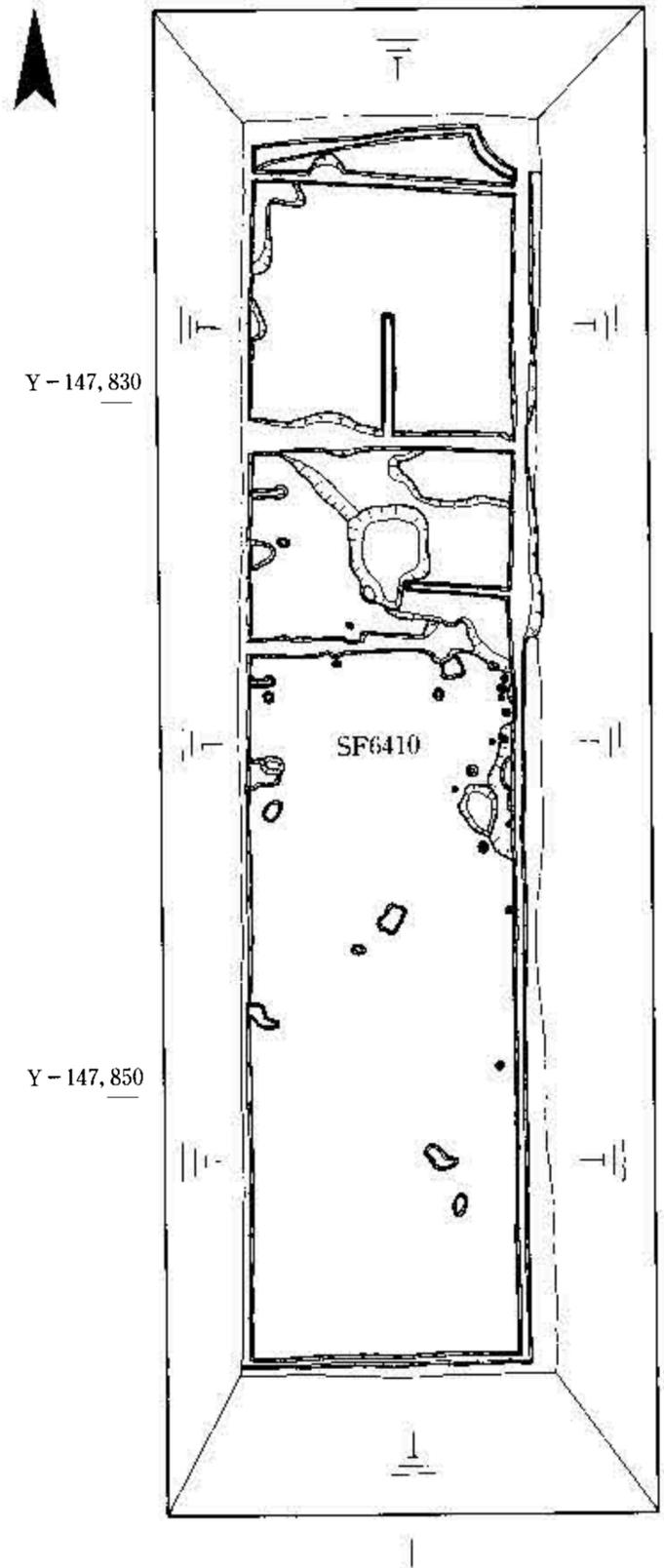


図155 第396次調査位置図 1:2500

Y-18,303



Y-147,830

Y-147,850

図156 第396次調査遺構平面図 1:300